

IV. 展示計画

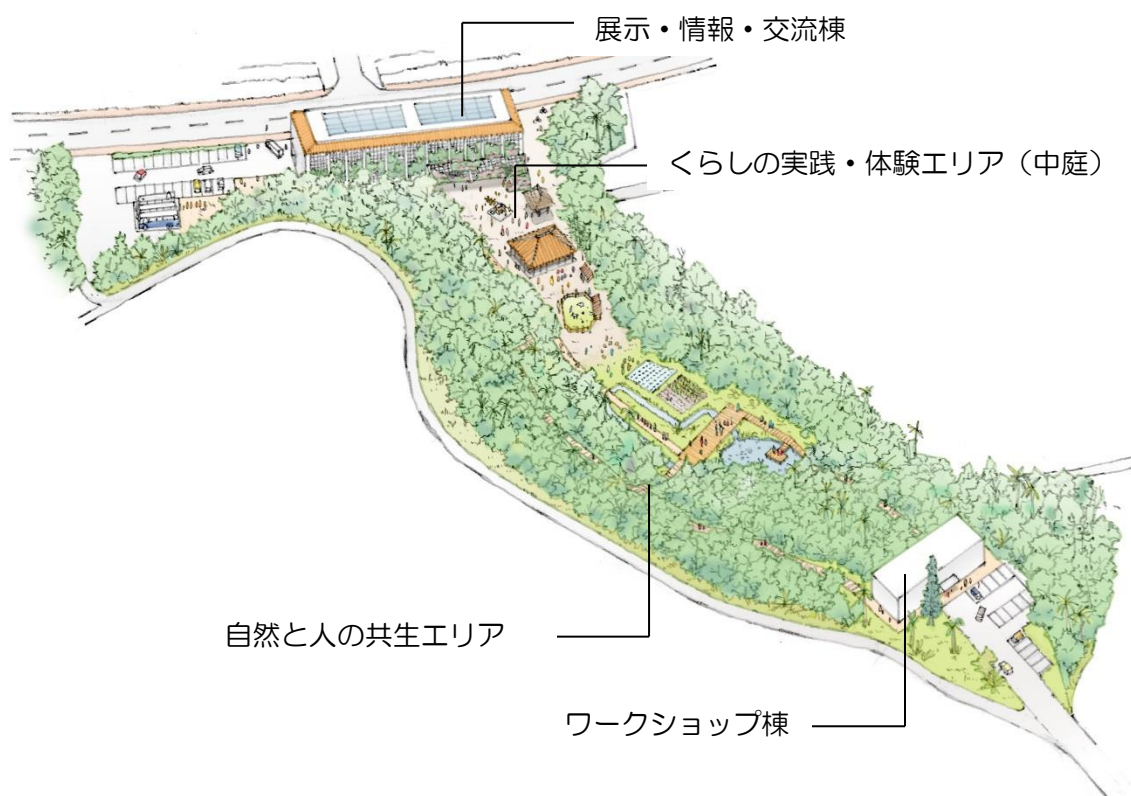
Exhibition plan

IV. 展示計画

1. 展示の位置づけと構成

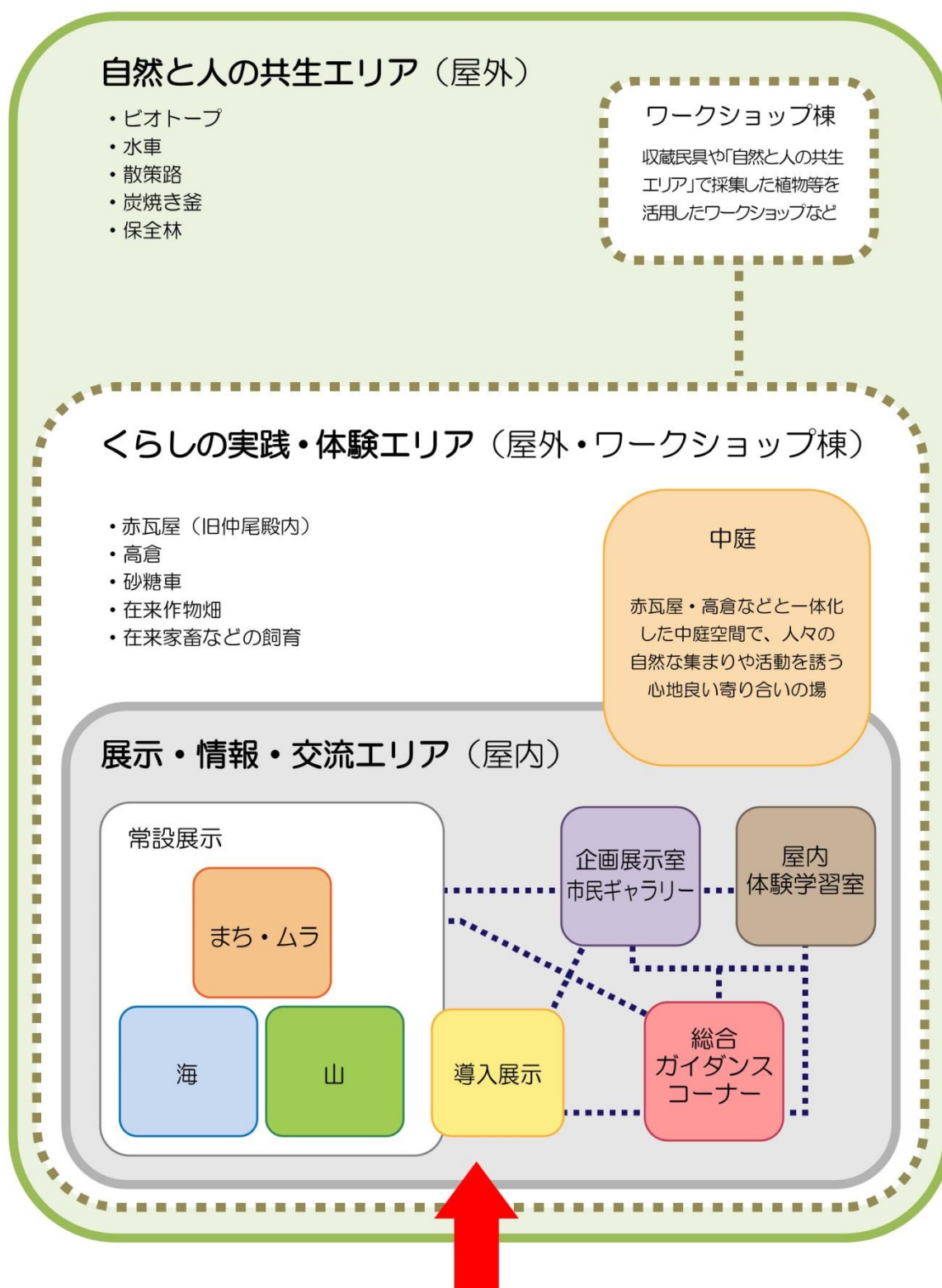
「名護・やんばるの自然と文化拠点施設」の主要な活動の一つとして、情報発信が挙げられます。「名護・やんばる」のフィールドに誘うガイダンス機能をより高めるためには、利用者の五感に訴えることが重要で、リアリティのある展示は大きな効果が期待されます。

本施設では、施設内の屋内展示と敷地内の屋外展示を充実させ、よりガイダンス効果の高い情報発信をめざします。その基本方針については、活動計画で挙げています。本施設の展示の中核である常設展示を中心に、初めて来訪した人や観光客向けの総合ガイダンス、地域の子どもやより深く学びたい人向けの屋外体験展示など、それぞれの展示機能について述べます。



IV. 展示計画

○展示の構成



IV. 展示計画

2. 展示・情報・交流エリアの構成と展開

(1) 導入展示

常設展示に入る前に、来館者が「名護・やんばる」地域の概要を全体的に捉え、自分の立ち位置を確認するための導入展示が必要となります。

たとえば、名護・やんばるの俯瞰（ふかん）図・写真などを展示することにより、来訪者は現在地を確認したり、観光スポット、拠点などを把握することができます。また、本施設から名護・やんばるのフィールドに来訪者を誘う効果もあります。



「名護・やんばる」の地形展示（名護博物館）

(2) 総合ガイダンスコーナー

「名護・やんばる」全体のガイダンスコーナーを設け、フィールド内の周遊スポットを紹介します。「名護・やんばる」の情報が集約された広域データベース「バーチャルミュージアム」を基に、これからフィールドへ出ていく人に役立つタイムリーな情報を提供します。ビギナーからリピーター、地域の方々から外国人まで様々なニーズに応え、また簡易に情報更新ができるガイダンスを検討します。



観光情報フロア（恩納村文化情報センター）



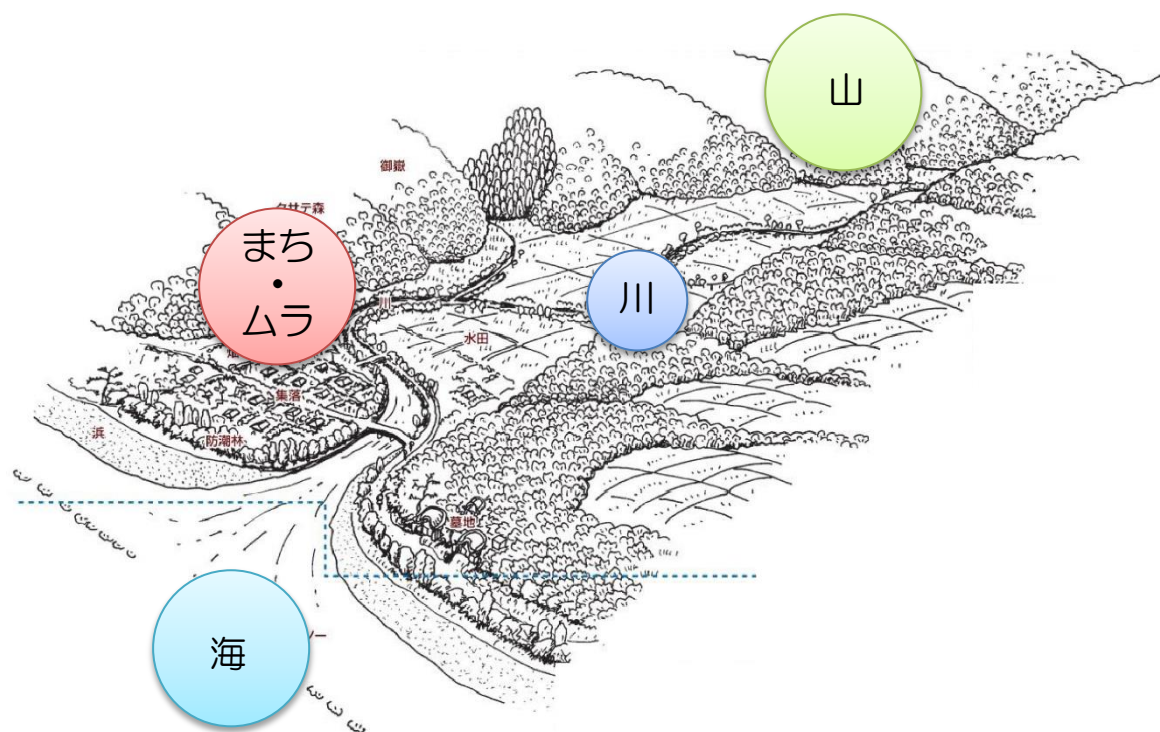
IV. 展示計画

(3) 常設展示

屋内の常設展示では、「名護・やんばる」の豊かな自然の中で育まれてきた多様な文化・歴史という視点を基に、大テーマとして「海」、「まち・ムラ」、「山」の3つを設定し、その中でそれぞれさらに細かなテーマを展開します。

これら3つのテーマの間には明確な区切りを置かず、展示に連続性を持たせるよう工夫します。来場者は、設定された順路に従って進むのではなく、自分の関心のあるテーマへ自由に足を運ぶことができるよう工夫します。

なお、時間軸に沿った説明を要する歴史分野などについては、それぞれのテーマの中でくらしや自然と関連付けながら紹介します。



やんばるの典型的な集落の模式図と展示テーマ

IV. 展示計画

○常設展示のテーマ構成

まち・ムラ

「名護・やんばる」の歴史とくらしの変遷

やんばる集落の成り立ち

やんばるのグスク・拝所と集落との関係、集落移動などの事象から近世期の集落の変遷を示す

グスクと集落
古島の形成
村落移動と近世集落

名護まちのにぎわい

海上交通や道路整備、学校・公共施設などの設立で起こった物流・情報

国頭街道と名護
名護十字路の変遷
名護の市場

やんばるの沖縄戦

名護・やんばるの沖縄戦と戦後の諸相を、生活者の視点で展示

名護・やんばるでの日本軍
収容所のくらし
戦後復興
復帰から現在まで

「名護・やんばる」ゆかりの人物

さまざまな形で名護に関わった歴史上の人物を、その背景とともに紹介

程順則（近世琉球とやんばる） 蔡温（近世琉球とやんばる）
宮城與徳（やんばるの近代） 徳田球一（戦前・戦後のやんばる）

ムラのくらしと自然

年中行事

豊年祭などの村落祭祀を、稲作との関わりやムラ・字との関わりを通して示す

各地区の村落祭祀 豊年祭

人生儀礼

地域差があり、時代とともに変容する名護・やんばるにおける人の誕生から葬送までの儀式、死生観

人の一生 葬送儀礼と墓制

生業

自然との対峙・共存のなかから生まれ、時代の淘汰を経てきた名護・やんばるの生業や、ものづくりに反映される生活文化

田畑の仕事（剥製と民具）
ものづくりの知恵

海

海のくらしと自然

ピトゥ漁の今昔

近海で見られる鯨類の生態、ピトゥ漁における海と人々の関わり

クジラ大型骨格標本 ピトゥ漁

沖合

外洋に生きる多様な生物から、その生態や島々との関係を読み解く

回遊生物 深海（鯨骨生態系など）
マグロ漁・カツオ漁

イノー（サンゴ礁）

“食糧庫”としてのイノーの環境、人々との関わり 等

サンゴ礁の生き物 藻類 シュロム ウミガメ…
サバニ漁、タンク船、イザリ

貝塚時代のくらし

島々の交流、海と集落の姿

大堂原貝塚の発掘調査
貝塚時代のくらし

干潟・河口

多様な生物を育む干潟、マングロープの役割と人々との関係 等

マングロープ干潟の生物
汽水域の生物 塩田

山

山のくらしと自然

地質と植生

地層と植生を通して、やんばるの成り立ちや固有性を示す

石灰岩と国頭マージ
天仁屋の褶曲

生物多様性

やんばるの多様な環境と生きものを紹介

やんばるの生物多様性
生態系再構成展示

山の恵みとくらし

やんばるの山の資源利用やくらしについて紹介

炭焼き、材木、薪 イノシシ猟と猪垣
藍栽培 蔡温と杣山政策

川

川から見えるやんばるの生態系やくらし、水源としての重要性などを紹介

水源地 溪流の自然とくらし
ダムと集落 生体展示

IV. 展示計画

① 展示テーマ：まち・ムラ

ア.「名護・やんばる」の歴史とくらしの変遷

○やんばるの集落の成り立ち

高台に居住したグスク時代の人々は、近世期には低地におりてきます。やんばるの集落にあるグスクやウタキ（御嶽）、フルムラ（古村）と称する場所などには、その集落の成り立ちを示す伝承も数多く残されています。

18 世紀ごろの伝統的な村は、背後にグスクやウタキをもち、その下の草分けの家から海の方へ碁盤型の集落を形成していきます。

一方、首里・那覇などから移り住んだ人々は、山中や川沿いに散在的に住みつき、屋取（ヤードゥイ）集落を形成しました。ここでは、現在も各地に残る碁盤型の集落形態や、首里王府との関係などを展示、紹介します。

○名護まちのにぎわい

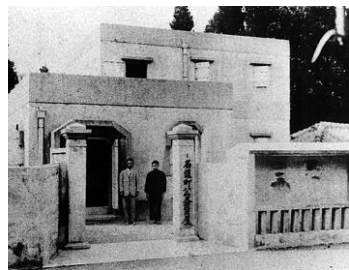
やんばるの中核都市である名護のにぎわいは、近代以降に国頭郡役所が名護の東江に移転したことや、国頭街道の道路整備がおこなわれたことに始まります。名護を中心とした海路と道路交通網の整備は、名護のまちを商業のまちへ発展させる要因となり、やがて、土族出身の商人や鹿児島商人も進出するほどのにぎわいを見せるようになりました。また、国頭農学校や県立第三中学校、県立第三高等女学校などが、人材育成に果たした役割も見逃せません。道路交通以外では、やんばる各地と中南部をむすんだ山原船の活躍も紹介します。やんばる各地から材木、薪、木炭、砂糖樽、藍玉（あいだま）などを中南部に運び、那覇や与那原港で買い入れた食料や泡盛、本土産木材、工業製品を、やんばる各村の共同売店などで売買した取引の状況も、近代のくらしを語る上で不可欠です。



名護大通り
1921（大正 10）年ごろ



名護大通り
1940（昭和 15）年ごろ



名護町公益質屋
1926（大正 15）年設置

IV. 展示計画

○やんばるの沖縄戦

沖縄の歴史上、物心両面で甚大なる被害を被った沖縄戦について、なぜ沖縄戦がおこり、どのような経過を経て、現在までつながっているかを表現します。やんばるの沖縄戦の特徴は、(1) 米軍上陸前の避難民の受け入れ(2) 宇土部隊・遊撃隊の戦闘(3) 三中・三高女の学徒動員(4) 山中での兵と住民の軋轢(5) 住民虐殺(6) 収容所からの戦後復興、などが挙げられます。沖縄戦の中で、これまで表現されてこなかったやんばるの戦争の実情について住民の証言を交えながら展示します。

○「名護・やんばる」ゆかりの人物

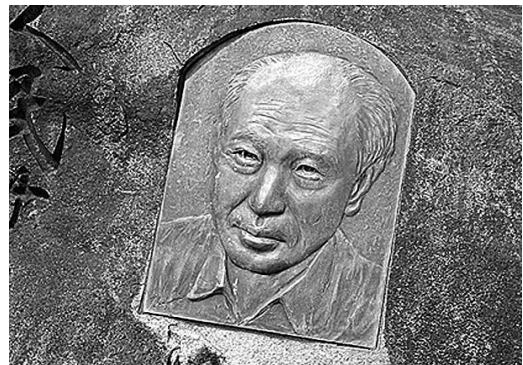
琉球王府時代から近現代にいたるまで、名護・やんばるにゆかりのある、あるいは影響を与えた人物を取り上げ紹介します。

近世期の人物では、程順則（ていじゅんそく）と蔡温（さいおん）などが挙げられます。程順則は、琉球に『六諭衍義（りくゆえんぎ）』をもたらし、蔡温は羽地大川の改修、杣山（そまやま）政策などを推し進めた功労者で、やんばるの歴史を語る上で欠かせない人物といえます。

近代では、沖縄・日本の状況から反骨精神を培い、社会運動をリードした徳田球一や、ゾルゲ事件に連座した宮城與徳など、一人の人物からその背景にある時代を投影する展示をおこないます。



名護親方（程順則）像



徳田球一石碑

IV. 展示計画

イ. ムラのくらしと自然

○年中行事

伊是名・伊平屋を含む「名護・やんばる」には全体で約 190 の字があり、名護市にはそのうち 55 の字があります。これらの地域には、ムラのコミュニティが今も色濃く残っており、それぞれに異なる個性がみられます。

ムラごとの年中行事は字単位で催され、その伝統が今も引き継がれています。エイサー、豊年祭、村踊りなどの催しは、現在でもムラをあげての大切な行事です。

ここでは、各字の御願行事を司るカミンチュ（神人）の存在や年中行事を通して、集落と自然との関わりを展示していきます。

○人生儀礼

このコーナーでは、人の誕生から葬送、33 回忌までの人生儀礼を展示します。時代とともに変容しつつあるとはいえ、地域との関わりという点で誕生から弔いまでをみると、「名護・やんばる」における地域のつながりが、今も強く残っていることがわかります。

○生業

「名護・やんばる」の人々が、自然の力や恵みを巧みに利用し、生業としてきた事例を展示します。農業でみると、近世期における貢納品であった米とキビの生産などが挙げられ、各地の間切と首里王府との関係とともに解説し、田んぼや畑の変遷、品種、栽培方法などとともに紹介します。

また、ウッチン（ウコン）やその他の農産品の栽培などについても展示します。



ウガンバーリー（名護漁港）



仏壇の供え物（お盆）

IV. 展示計画

② 展示テーマ：海

海は、沖縄のくらしと自然を考える場合に必要不可欠な要素です。ここでは、「名護・やんばる」のフィールドをモデルに、やんばるの海の自然と人との関わりを展示します。

ア. 海のくらしと自然

○ピトゥ漁の今昔

鯨類は、海のくらしに関係の深い生物です。名護湾地域を中心として、コビレゴンドウなどの小型鯨類を対象とする「ピトゥ漁」が昔から盛んにおこなわれており、今も続いています。1950～60年代には、春先に回遊するザトウクジラをおもな対象とした、大型捕鯨もおこなわれていました。

このコーナーでは、開館当時から名護博物館が収集し続けてきた豊富な鯨類の骨格資料を基に、「名護・やんばる」近海で見られる鯨類の生態、捕鯨の歴史などを紹介します。

○沖合

サンゴ礁の外側に広がる沖合は、普段の私たちの生活とはあまり関係ないように思われがちですが、物質循環や生態系の観点から考えれば決して無関係ではありません。たとえば、私たちになじみの深い生物の中には、大海原を回遊・浮遊して移動するものもたくさんいます。また、私たちが陸域で出すゴミは海へ流され、人の手が到底届かないような深海に蓄積され問題になっています。

このコーナーでは、近海漁業や回遊・浮遊する生物、深海の生態系などにスポットを当てて紹介します。



沖縄近海の鯨類骨格標本・レプリカ（名護博物館）



カツオ漁（名護博物館企画展示）

IV. 展示計画

○イノー（サンゴ礁）

沖縄を特徴付ける生物地形であるサンゴ礁は、裾礁（きょしょう）、堡礁（ほしょう）、環礁（かんしょう）にわけられます。沖縄島の多くで見られる裾礁は、潮の干満で干上がるヒシ（礁原）と浅い水深を持つイノー（礁池）を持つことが多く、その縁にある礁縁（白波が砕ける部分）をはさんで、その外側の水深が急に深くなる礁斜面へと続きます。

サンゴ礁は生物多様性が高く、人々は昔からヒシやイノーで漁をおこなって海の幸の恩恵を授かってきました。また、サンゴ礁は天然の防波堤の機能もあり、台風や津波から人々や農地・集落を守る役割も果たしてきたのです。

このコーナーでは、サンゴ礁で見られるさまざまな環境とそこでくらす生きもの、伝統的な漁具・漁法などを紹介します。



イノー（今帰仁村）



タンクブニ（名護博物館）

○貝塚時代のくらし

今から約 2,000 年前、沖縄貝塚時代後期（弥生時代）の沖縄では、黒潮や貿易風を利用して本土（九州など）からやって来る人々を相手にする、貝交易がおこなわれていました。

やんばるでは、大堂原（ウフドーバル）貝塚を代表とするさまざまな貝塚時代の実態が、過去の発掘調査によって次第にわかるようになってきました。このコーナーでは、サンゴ礁の展示と合わせて、「名護・やんばる」の発掘調査の成果や最新の学説を基に、貝塚時代のくらしを紹介します。



沖縄貝塚時代の土器（名護博物館）

IV. 展示計画

○干潟・河口

マングローブがある干潟や、海水の影響のある河口域は生物多様性の高い場所です。干潟はさまざまな生物が生息しており、物理的、生物的に有機物を分解し、水を浄化する機能を備えています。河口域は、陸を流れる川の淡水域、上流の水源地、山林へとつながる入口でもあり、さまざまな生きものが移動するときの通過点として、あるいは、成長する場所として重要です。

また、名護市の屋我地島では、こうした干潟に入浜式の塩田を造り、古くから塩づくりが営まれてきました。これらの干潟・河口域の環境やそこにくらす生きもの、塩田による製塩や漁など、自然の中での人の営みを紹介します。



大浦のマングローブ林（名護市指定天然記念物）



製塩道具（名護博物館）

IV. 展示計画

③ 展示テーマ：山

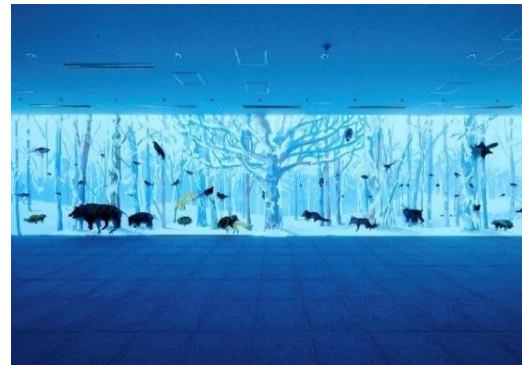
ア. 山のくらしと自然

○地質と植生

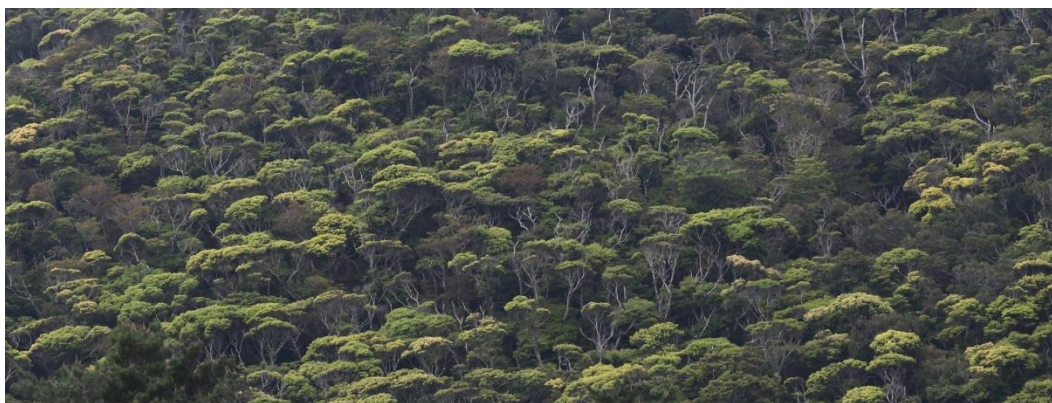
「名護・やんばる」の地質は、おもに中生代以前に形成された岩石からなり、中南部に比べて高い山や溪谷、河川が発達し、豊かなイタジイの森林に覆われています。多くは砂岩、泥岩などからなる堆積岩を主とする地層ですが、本部半島には古期石灰岩を主とする地層も分布しています。このような特徴から、東海岸の褶曲（名護市天仁屋）、本部半島の円錐カルスト（本部町山里）、塩水が湧く塩川（本部町崎本部）など、国内でもめずらしい貴重な地形・地質を見ることができ、重要な地域資源といえます。

これらの地質の特性による土壌の違いは、その地域で見られる動植物の種類にも影響を与えます。一般的にやんばるの森として連想されるイタジイ（オキナワジイ）の森は、「国頭マージ」と呼ばれる酸性土壌であるのに対して、石灰岩が発達する本部半島では特異な土壌が優占し、他と異なる植物が見られます。

このコーナーでは、地形・地質によって異なる植生を取り上げながら、「名護・やんばる」の代表的な観察スポットも紹介します。



プロジェクションマッピングを使った景色の再現（TAKAO 599 MUSEUM）



イタジイの森

IV. 展示計画

○生物多様性

琉球列島は日本の中でも生物多様性の高い地域です。亜熱帯に位置し、南方系の生物が多いほか、大陸との分離・結合を繰り返してきた歴史から、島々で独自に進化した固有種が多く見られます。山々は比較的高く、豊かな自然が残る「名護・やんばる」の森・川は、固有種あるいは絶滅が心配されている貴重種が生息する地域です。

しかし、生物多様性の土台となる生物の多様な生息環境を考えた場合、このような人里離れた奥深い森だけでなく、集落に近い林や農耕地など人々の生活空間と重なる地域にも目を配る必要があります。

このコーナーでは、集落に近い里山的環境から人里離れた山奥の環境まで、多様な環境で見られるさまざまな生物を紹介し、生物多様性と人々の暮らしとの関連について考えていきます。



名護市内のイバイモリ（沖縄県指定天然記念物）



昆虫の多様性展示（名護博物館）

○山の恵みと暮らし

人々が利用する山の資源は、生物多様性が維持された豊かな生態系に支えられています。リュウキュウイノシシは農作物を食い荒らしますが、同時に貴重な食料でもあり、猪垣の設置とともに琉球犬を用いたイノシシ猟＝インビキ（犬曳）がおこなわれてきました。やんばるの山々は、重要な木材の供給地であり、かつては薪として切り出された木々が山原船で中南部の都市へ運ばれました。

また、森林による保水能力が高いため、今現在でも沖縄島の重要な「水源地」の役割を果たしており、北部にある多くのダムから中南部へ送水されています。

しかし、行き過ぎた山の利用は、生態系を脅かし、資源の枯渇を招きます。琉球王府時代にすでに蔡温（さいおん）による森林保護のための「杣山（そまやま）政策」があったように、限りある資源を守りながら利用することは、昔からの課題でした。

このコーナーは、山々の自然の中で営まれてきた生活を紹介するとともに、過去から現在、そして未来へ向けて私たちが直面している課題を取り上げ、自然と共生する暮らしを考える場とします。

IV. 展示計画



インビキ（名護博物館）



炭焼きなど山の生業（名護博物館）

〇川

水源地や食料の源として重要だった川の自然とくらしを紹介します。水槽を用いた生体展示のほか、漁具等の民具や標本を混在させたジオラマなど、他の3つのテーマ（地質と植生、生物多様性、山の恵みとくらし）と関連づけた展示を検討します。また、本来「海」と「まち・ムラ」に跨るテーマであるため、それらとの関連性にも配慮します。



水槽による川の生きもの展示（名護博物館）



IV. 展示計画

(4) 企画展示・市民ギャラリー

大テーマの位置づけが難しい美術工芸資料や、常設展示ではカバーできないような、より専門性・地域性の高いテーマについては、企画展、特別展などで紹介していきます。季節ごとのトピックや他の文化拠点と連携した展示、企画展の共催も検討していきます。企画展示室の一部は空間を区切って市民ギャラリーとして開放し、市民による展示活動の場をつくれます。



名護博物館での企画展の様子



やんばるをテーマとした講演会（名護博物館）



市民ギャラリーの利用（名護博物館）

IV. 展示計画

3. 屋外展示の構成と展開

屋外展示は、より本物に近く、自然環境の中で空間の制約がなく展開できる点では、屋内展示より優れているといえるでしょう。しかし、保存・管理の面ではより一層の配慮が必要となります。

「名護・やんばるの自然と文化拠点施設」では、野外で展示可能な資料や敷地の豊かな自然環境を活用し、実際の資料を使った手作業によるものづくりや、様々な体験が可能な空間を設けることで、テーマである「くらしと自然」をより実感できる展示にします。これらの展示が、施設外のフィールドに足を運ぶ入口の役目を果たすことにもなります。



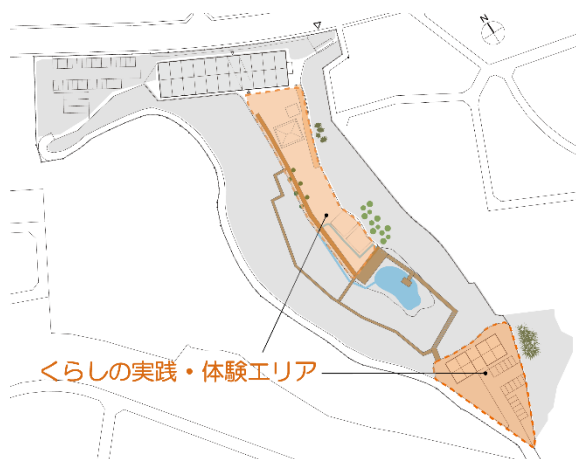
IV. 展示計画

(1) 暮らしの実践・体験エリア

伝統的な「名護・やんばる」のくらはしは、循環型社会へのヒントを私たちに与えてくれます。かつてのやんばるでは、アタイグー（野菜畑）で作物を育て、芭蕉から着物を織り、竹からバーキ（かご）などの道具をつくる自給自足型の生活が営まれていました。生活から出る糞尿やゴミは家畜のえさや堆肥に使われ、育てた作物や家畜をまた食べるという循環型社会が実現していたのです。

くらしの実践・体験エリアでは、古民家などを再現展示して「名護・やんばる」のくらしの中で培われた知恵やわざを体感・実践することで、過去から現在、未来へつながる普遍的な価値を見出すとともに、新たな発見や創造を通じたものづくり・人づくりを支援し、地域住民と観光客らが交流できる空間をめざします。

また、過去の再現展示だけでなく、微生物で分解する浄化槽の仕組みや、農業用水路に水車を設置して動力や電力への転換を見せるなど、現代のテクノロジーを融合させることによって、持続可能な未来へむけて物質循環やエネルギーについても考えることのできる展示を検討します。



IV. 展示計画

① 赤瓦屋

「名護・やんばる」のくらしをより深く知るためには、生活空間、すなわち、生活の土台としての住居を再現することが一つの鍵となるでしょう。復元された住居に入り、生活空間にふれることで、そこにくらす人々の心情や想いを読み取ることができます。また、こうした空間で、昔の道具を使った手作業を体験し、人と人が触れ合うコミュニケーションが図られることで、新たな発見や創造が生まれ、ものづくり・人づくりにつながるのです。

「名護・やんばる」の人々が住居の屋根に赤瓦をのせることができたのは、明治 20 年代になってからのことです。それでも、ウェーキヤー（裕福な家）でなければ、このような家を建築することはできませんでした。今回、復元を検討している仲尾殿内（なかおドンチ）は、名護市羽地地区に位置する仲尾次の豪農であり、1902（明治 34）年に建築されましたが、老朽化によって平成元年に取り壊され、一部の部材が保管されています。建築面積は 121.95 m²（36.68 坪）であり、復元されれば、木造の伝統的な間取りや、指し仕口などの木工技法の見本と材種名を示す展示建造物になるでしょう。

ここでは、可能な限り民具を展示し、実践的な体験学習やものづくりの場として活用します。資料の保存上の課題はありますが、より臨場感のある展示空間となることをめざします。

また、民家は来館者や博物館活動に関わる人々の憩いの場でもあります。民話の語り、紙芝居などの上演、芸能教室の開催場所などに利用することも可能です。



赤瓦屋（屋部久護家）

② 高倉

高倉は、カヤブキヤー（茅葺屋）とされるリュウキュウチクを材料とした屋根の建造物で、穀物貯蔵に使用されました。住居としてのカヤブキヤーには、掘立小屋同然のアナヤー（穴屋）と、よりしっかりした木造のヌチジャー（貫木屋）がありました。いずれも、戦後に普及したセメント瓦屋より古い



高倉（謝名城の高倉）

IV. 展示計画

建築物です。

高倉は、名護博物館に移築復元されている「謝名城の高倉」(名護市指定文化財)を移築します。

③ 中庭

展示・情報・交流棟と赤瓦屋の間のエリアでは、昔の道具を使った地域ならではの人の営みを体験することができます。サーター車で実際にサトウキビを絞り、中庭から連続した屋内体験学習室で調理をおこなうなど、ここでしかできない体験ができる場とします。

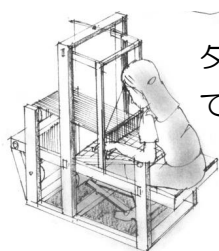
「自然と人の共生エリア」で育てた植物などを活用したものづくりをおこなうこともできます。竹林から竹を取っておこなうバーキ(かご)づくり、芭蕉から繊維を取っておこなう糸づくり、タカバタ(高機)を使った布織りなど、さまざまな活動に展開させることができるでしょう。



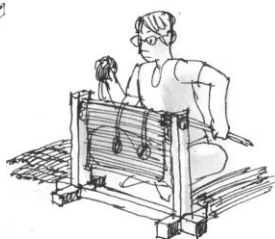
サーター車体験



バーキ(かご)づくり



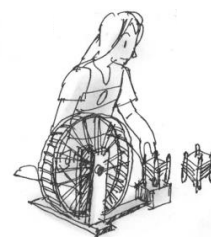
タカバタ(高機)
で布織り



ムシルバタでイグサ織り



トーフウーシ
(豆腐)体験



ヤーマ(糸車)体験

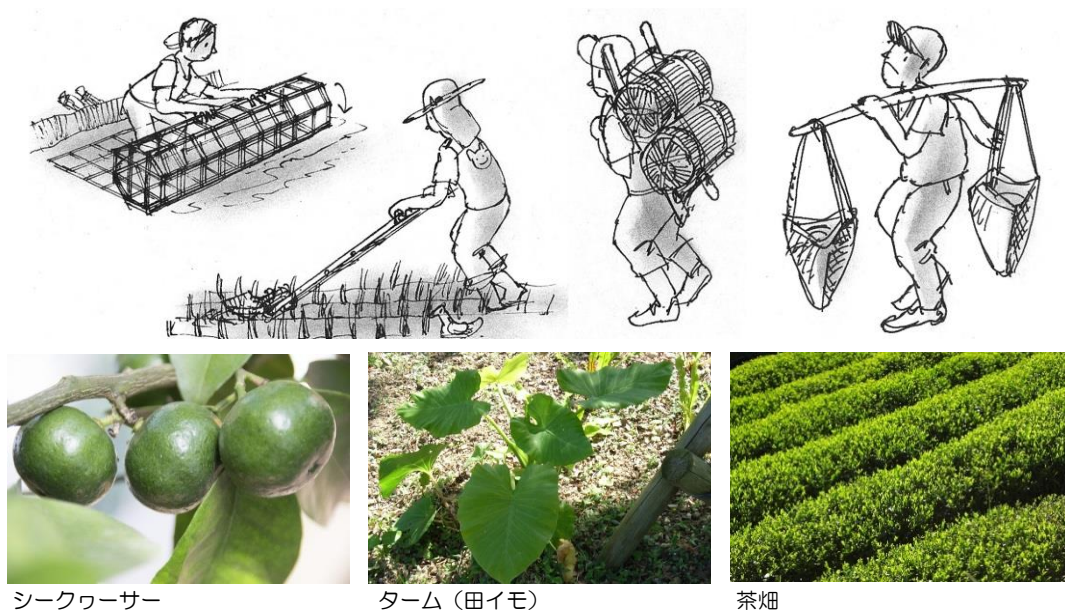
その他の活動

敷地内で取れた芭蕉から布を織る／稲作の脱穀や精米／さまざまな民具の使用体験(アイロンなど)／仏壇への供え物(死生観や季節変化など)／芸能教室／民話の語り、紙芝居などの上演／雨水の集水装置の学習 など

IV. 展示計画

④ アタイグゥー（在来作物畑）

田畑や果樹園では、在来の作物を育てて収穫します。バーキづくりの材料となる竹林や家屋の材となる樹木（チャーギなど）、布・紙の原料となる芭蕉なども育てていきます。農業体験に加えて、材料を加工するものづくりや、シルビイシ（印部石）を使った農地の測量体験、農作物と生物の関係性を探る環境学習など、さまざまな体験学習と関連づけて使用することができでしょう。



⑤ 在来家畜などの飼育

来場者にとって、生きている動物は、はく製などに比べて格段に魅力的な存在です。ここでは琉球犬やシマピージャー（ヤギ）などを飼育し、その利用方法を紹介して、「名護・やんばる」の狩猟や家畜文化について考える場とします。

また、カメなどの飼育展示を通して、現在名護・やんばるで課題となっている外来種問題等についても紹介し、自然と人の共生エリアとの関連性を持たせます。



IV. 展示計画

(2) 自然と人の共生エリア

私たちは、生態系からさまざまな恩恵を受けています。それは単純に食料として資源を得ているということだけに留まりません。食料資源はもちろんのこと、水の浄化や廃棄物の分解、気候調節、光合成による酸素の供給、水や栄養の循環など、生態系から人間が受ける利益は計り知れません。たとえば極端な話、植物がなければ酸素はつくられず、二酸化炭素が増えるばかりで、やがて動物も呼吸できずに死滅するでしょう。豊かな水や栄養がなければ、良い作物は育たないでしょう。



このように、私たちが生態系から受け取る恩恵を「生態系サービス」とよびます。私たちが木陰に入って涼んだり、森の中で川のせせらぎの音を聞きながらキャンプをしたりするレクリエーションも、生態系サービスのひとつといえます。

生態系サービスを安定して受け続けるためには、安定した生態系が必要であり、そのためには生物の多様性が保たれていることが重要と考えられています。生態系は私たちが考えている以上に複雑で、人為的に自然改変をおこなう場合は、本来の生態系のバランスをくずし、生態系サービスの不安定化を招く恐れがあるということを忘れてはなりません。

「自然と人の共生エリア」では、人里から山へ続く自然の連続性を体現したフィールドで、自然と共生してきた「名護・やんばる」のくらしを体感し、「循環型社会」と「生態系サービス」をキーワードにして、自然と人との共生について考えることのできるエリアとします。

① ビオトープ

人里、里山的自然環境を再現し、散策路や休憩所を整備して自然観察ができるようにします。アタイグワー（在来作物畑）や在来家畜飼育スペースとの連続性に配慮します。

水田とつながる自然度の高い水路や小川、クムイ（池）のある環境は、かつては普通に見られた光景ですが、現在は失われつつある環境で、こうした場所を好むメダカやドジョウ、タウナギなども姿を消しつつあります。本施設建設予定地の敷地内の谷間は元来湿地環境であり、このような環境をビオトープとして再現すること

IV. 展示計画

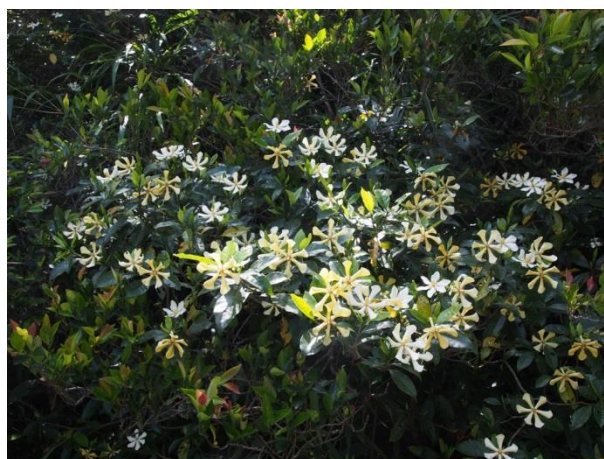
で、魚や水生昆虫、これらを食べるカエルや鳥類など多様な生物によって構成される生態系を観察することができます。

なお、自然と人の共生エリアの展示は、人々のくらしと生物多様性をテーマにしており、それは人間にとって都合の良い自然を見せるということではありません。人々の関心が高い、あるいは見映えの良い特定種を過剰に増やしたり、本来はこの地域に見られるはずのない生態系を再現したりするという意味合いでもありません。

また、失われつつある本来の生態系を再現する場合においても、施設周辺の生態系や遺伝子を攪乱するおそれがあるので、十分な検討が必要です。



カクチョウラン



クチナシ



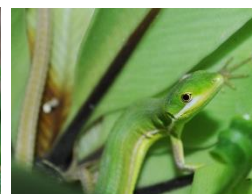
リュウキュウカジガエル



ミナミメダカ



リュウキュウハグロトンボ



アオカナヘビ

② 里山の自然散策路

市街地の中に残された建設予定地の緑地を可能な限りそのまま活用し、里山的な環境を持つ林の中を散策して自然観察ができるようにします。「くらしの実践・体験エリア」や上記のピオトープから連続する林であり、くらしの身近で見られるさまざまな生態系を観察することができるでしょう。食草とチョウの関係、ドングリを付けるシイの木と昆虫（クワガタなど）の関係、林や田畑にすむ昆虫をエサにして子育てする鳥などが代表例です。この林はあくまで人里から近い環境を代表するものであり、一面がイタシイ林で覆われ、ヤンバルクイナなどが生息するやんばるのより自然度の高い森の環境ではありません。そのような環境で見られる生態系については常設展示の一部と、他の研究施設や「現地の本物」に譲ります。

IV. 展示計画

③炭焼き窯

イタジイに覆われるやんばるの豊かな森は、人々にとって命の源でした。電気やガス、セメントなどが普及する以前は、樹木がエネルギーと原材料の素であり、中南部へ供給する薪や木炭の生産は、やんばるを含め沖縄の暮らしを大きく支えていました。

自然散策路の一角には、木炭生産用の炭焼き窯を再現します。炭焼き窯は、地域の人々や子どもたちとともにワークショップをおこない、手作りでつくりあげます。「くらしの実践・体験エリア」での体験学習に使用するための木炭づくり講座など、炭焼き窯を実践的に使用することも想定します。



炭焼き窯跡